彙報

フランス哲學界の現況

フランス學術の精華「フランス科學」がはじめて刊行されたのは一九一五年であつた。それは、フランス文部省が、世界大戰勃發直後桑港に開かれた萬國博覽會に出品せる全フランス科學に亙る古今の文獻への手引として、各部門の巨匠に委囑して作つた略述を後に二卷に編んだものであるが、フランス學術の光輝ある傳統を語ると共に、國民の學術に對する熾烈なる關心を示すものとして、誠に誇るべきモニュメントであつた。爾來十八年、各部門の目覺しき發展、新興諸科學の著しき進出はその改修を餘儀なくさせた。新版「フランス科學」は、「宗教史學」「物理化學」「比較文學」等々の新しき分科を加へ、特に第二卷「先史學」「東洋學」「歷史的諸研究」の方面に於ては、その相貌を全く新にしてゐる。「哲學」はベルグソンとルロアとの共敍となり、「社會學」に於ては、デュルカンを承けて、モスが「一九一四年以後のフランス社會學」を敍述してゐる。新に加へられた「宗教史學」はシャルル・ギニュベールの執筆により、「教育科學」はラビーからオーリアクの手に移つてゐる。「哲學」に於ても、隨所に改修の跡が見られる。それは、過去十數年間に於ける哲學的關心の推移と哲學者に對する現代的評價の變化を示すものである。フォントゥネルやヴォーヴナルグやラニュオ等は特に注意され、アランは脚註にその名を出してゐる。書目からその名が失せたものには、クザン、フイエ、ブロシャール、リアール、加へられたものには、レヴィ・ブリュル、フレデリク・ロー、ゲュスターヴ・ベロー、バロディ、ブロンデル、ドゥラクロア、ブレモン、デューアン、ラランド、メーエルソン、ブランシュヴィク、アムラン、ラニュオ、ルロアがある。ベルグソン哲學に就いてはルロアが、ルロアについてはベルグソンが書いたと特に斷つてゐる。

ベルグソンは一九一九年「精神力」の序言に於て豫告してゐた第二の論集を出した。「思惟と動くもの」と題されてゐる。例によつて我々の手に入つたものには第三版とか四版とか記されてゐる。第一の論集なる前掲書が研究の結果を示すものであるのに對して新著は研究の方法、或は研究そのものに關する。卷頭には、新にこの書のために書かれた序說二章がある。これは彼の哲學的方法の諸始源とその方法を適用しつゝ進んだ道程を示すものである。第三章「可能的なるものと實在的なるもの」もフランス語で發表されるのは、はじめてである。この論文は一九二〇年オクスフォードの哲學會に於て述べたものに由來し、三〇年ノベル賞授與に際してスウェデンの雜誌「北方時報」に發表したものである。他の諸章は一九〇三—一三年間の論文講演である。採錄の順序に從へば、先づ二つの講演がある。その中「哲學的直觀」は一九一一年ボロニァの第四回國際哲學會に於て、「變化の知覺」は同年オクスフ

ードに於て二回に亘つて、なされたものである。次に有名な「形而上學序論」がある。これは、はじめ一九〇三年「形而上學及び道德評論」に發表されたもの、その佛語版は早くから稀覯書の一つであつたが、十數ヶ國語に移されてゐる。最後に學者についての遺想、學說の紹介が三章ある。第一は一九一三年、近代フランスの最も重要なる生理學者クロード・ベルナールの生誕百年記念の講演、第二はウィリアム・ジェイムズの「プラグマティズム」の佛譯版（一九一一年）の序文として書かれた「眞理と實在」、第三は一九〇四年ラヴェソンの補缺として道德及び政治科學學士院の會員に列せられた際のエロジュ、「ラヴェソンの生涯と著作」である。

これらの容易に入手し得ない論文、講演が一書に蒐められたことは勿論感謝すべきことである。だが、この書から何等かの新しきものを期待することは元來誤つてゐる。新しく書かれたといはれる序說も一九二二年一月に終つてゐる。それは、發行の順序とは逆に、「道德及び宗教の二源泉」の先驅をなすものである。だから、この書はベルグソンの哲學的生のドュキメントとして讀まれるべきものである。そこに於て語られてゐるのは、我が哲學者が傳統的方法を捨離して、純粹持續の直接的直觀に到つた道程である。時間と實在的なるものを超越し、或は離脫せんとするのではなく、その躍動に從はんとする努力である。彼が捨てた合理論の武器をとつて彼に戰を挑むもの、彼の哲學を非科學的として斥ける似而非學者、それらの批評に對して彼自らを守らなければならない。實證科學者の中には、形而上學的構成を斷然排すると稱しながら、粗笨なる構成を敢てして憚らないものがある。科學は、自己をあまりに狹小なる範圍に閉ち込めてはならない。又あまりに廣汎なる概括に急いではならない。人間の知性、概念に對する過信を棄てゝ、新しき認識の源泉、直觀から直接に汲まなければならない。尙ほベルグソンの嚴しく斥けるものに、眞理の社會化、平俗化がある。それは原始的諸社會には避け難いものである。人間の精神は元來科學的研究のために創られたものではない。大衆が眞理を平俗化するのは當然である。それは、それに固有の領域、實踐の世界に於ては或は許されるかも知れない。しかし、科學的或は哲學的眞理に關する限り何物をも與へることは出來ない。我々は、安易なる道を捨てゝ、困難なる認識の方法、直觀に、本能や情感ではなくして、絕えず努力を新にする內的反省としての直觀に賴らなければならない。人間は本來ホモ・ファベルである。彼のファブリカーティオを反省するとき、ホモ・サピエンスとなる。我々は口からさきに生れた人間といふやうなことをいふが、それはホモ・ロクワクスである。このお喋りする人間だけは、斷然斥けなければならない。この饒舌なる人間は、考へるといつても、彼のお喋りの反省のみであるから。

現在のソルボヌの文學部の教官には、哲學科關係に次のやうな人がゐる。我々には「哲學辭典」の編者として先づ知られてゐるアンドレ・ラランド（哲學）、フランスとしては珍しい綜說的「哲學

史」の著者エミル・ブレイエ（哲學及び哲學史）、「ギリシア哲學に於ける生成の問題と運動の觀念」や「スピノーザ哲學に於ける本質と存在の觀念」の如き精緻なる研究を既に學位論文として出したアルベール・リヴォ（哲學及び哲學史）「ギリシア思想」の著者として、又プラトーンに關する幾多の飜譯や研究で有名なレオン・ロバン（ギリシア哲學）、我が國には夙にパスカルやスピノーザの研究家として知られ、その近著「自我の認識」が可成り多くの讀者を見出したレオン・ブランシュヴィク（近世哲學）、最近「精神の哲學」といふ叢書に「全體的現存」といふ小書を出したルイ・ラヴェル（哲學）ジャン・ラポルト（哲學史）、所謂「シャンティスム」の驍將アベル・レー（科學の哲學及び科學史）、宗教心理の研究者として知られてゐるアンリ・ドゥラクロア（心理學、現在學長を兼ねる）その編輯による「心理學汎論」及び「續心理學汎論」で有名なジョルジュ・デュマ（實驗心理學）、その下にイニュアース・メーエルソン（昨年物故したエミール・メーエルソンとは別人）、アンリ・ワロン（兒童心理學）、デュルカンから出て多少の特色を示し、その著者の二三は邦語に移されてゐるセレスタン・ブーグレ（社會經濟史）「責任論」で有名なポール・フォコネ（社會學）、「フランス道德史」の著者アルベール・ベイエ（道德學、ラテン文學の方にジャン・ベイエといふ人がゐる）。

左腕の全くないブレイエ教授は見るから痛々しさと眞劍さを感じさせる。その眞面目一徹は寸毫も不眞面目を容赦しない。懇切なる指導を以て有名なラランド教授の温顏には子に對する父の愛情が溢れてゐる。ブランシュヴィクとロバンの兩教授は、その哲學者らしい風格によつて何れも學生を惹きつけてゐるが、前者が警句や洒落を輕くいつてのける西洋風の學者であるのに對して、後者はあたかも東洋の枯淡なる碩學に接するが如く、全く學をたしのむといふ趣がある。たゞブランシュヴィク教授の講義の判り難いのには閉口させられる。リヴォ教授は、その眞面目な講義にかかはらず、あまり學生からは慕はれてゐない。それはあまりに教師の觀にはまつて、思想家的素質に乏しいからともいへようか。新進ラヴェルは荒削りながら、哲學の根本問題に眞正面からぶつかつて行かうとするはちきれさうな熱を以て學生を魅してゐる。

こゝで、彼等によつて取扱はれてゐる問題や哲學者は我々のとは少々異るところがある。一九三三—三四年の學期に於けるラランド教授の論理學と方法論に關するエクスポゼの問題を見よう。スピノーザによる眞理と誤謬、同じくライプニツによるそれ、マッハによる誤謬の問題、同じくプロシアルによるそれ、ヒュームに於ける認識と信念、カントに於ける思惟、認識、信仰、ルヌヴィエに於ける確實性、ニューマンの「グラマー・オヴ・アセント」に於ける承認の說、プラグマティズムとは何か、ジェイムズによる眞理の本性、ラプラスに於ける蓋然性の觀念、クルノーに於ける哲學的蓋然性、ショーペンハウエルに於ける論理的推論と直觀との對立同じくベルグソンに於けるそれ、レヴィ・ブリュールに於ける論理的推論と先論理的推理との對立等々、かく見來れば、これらの問題は全くフランス哲學の傳統の中を動いてゐる。しかし、それはあまりに學校的哲學の色彩が濃くはないかと思はれるだらう。し

かしフランス哲學には長き傳統がある。それは安價なる移入を阻むと共に、獨自なる問題の生育を護つてゐる。又、哲學教授の方法も、學生そのものの中に於ける哲學的問題の生成を目指してゐる。學生に始終論文を書かせてそれを教室へもつて來て批評するといふやり方は教科書張りの講義でことをすませるのに優ること萬々である。尤も、我々には外國語といふ大きな障害がある。ソルボヌでは、ギリシアの古典は別として、英獨のものは必しも原書を讀むことを要求せず、多くの場合は佛譯ですませる。それは彼等には一流學者による、時としては原著に優る飜譯を惠まれてゐるからでもあらう。

次に、ソルボヌの教授達の最近の業績の二三を紹介しよう。ブランシュヴィクは、彼の學位論文「判斷の樣態」の第二版を出した。それは一八九七年ラテン語の論文「如何なる根據によつてアリストテレースは形而上學的なる意味がシュロギスムに内在することを證明したか」と共に提出されたもの、リセ・コンドルセに於ける恩師ダルリュに捧げられてゐる。新版に附加された序言五頁は、この書の成立を促した當時の學界への回想として讀まれることが出來る。それはもう一世代以上も以前の書であるが、今尙ほ顧みられるべき特色ある思想を盛つてゐる。先づ、概念が判斷の基礎であるのではなくして、判斷こそ概念の基礎である。それ故概念的に理解するとは判斷することである。判斷の樣態とは、批判的反省、判斷に關する一種の判斷である。それは單なる判斷ではなくして、ドイツ哲學者の用語に從へば價値判斷である。判斷の樣態といふ論理學的問題は、それ自らの中に、判斷の眞理性といふ形而上學的問題を含んでゐる。ブランシュヴィクに從へば、判斷は認識の構成的作用である。存在の肯定は判斷の特性的なる標識である。存在は思惟のはたらきである。存在の定義を與へることが哲學の本質的なる課題であるならば、かゝる存在の定義の原理は思惟そのものの中に求められなければならない。彼によれば判斷の形式は統一の形式である。動詞はそれによつて二つの觀念が、現實に於てもはや二つとしてではなく、唯一の觀念を形成するやうな仕方に於て結合されることを意味する。「あり」は知性的統一を主張する。それは、諸觀念に對して外的なる紐帶ではない。さうではなくして、諸觀念は内的に結合してゐる。そして「あり」といふ動詞の根據は、諸觀念相互の内面的なる關係にある。認識とは精神の自己認識、認識といふはたらきに於ける自己發見である。尤も、精神は認識に於て、彼自身のものでないもの、不透明なるもの、貫徹し難いもの、卽ち物を見出すであらうが。精神は、概念の哲學が考へるやうに、可能的なるものから現實的なるものに進むのではなくして、現實的なるものから可能的なるものへ進むのである。形而上學的存在は自己充足的、不動、不變として、卽ち實體として考へられるに反して、判斷の存在は精神の行に内在してゐる。實在は決して精神から分離せるものではなく、その内的發展に織り込まれてゐる。精神の眞の進歩は、内面性の形式に向ふことである。外面性は結局それ自らの否定である。内面性の

理想とは、思辨的秩序及び實踐的秩序に於ける統一である。この理想に自己を近づけるとは、科學に於て道德的生活に於て自己を高上させることである。世界全體に、數學的分析をその典型とする説明方法を適用すると共に、人類に、或る宗教的諸團體がその範例を示す完全なる聯帶性を適用することが眞の文化への道である。即ち內面性への進歩は、人間文化の努力と調和する。統一への努力は哲學と科學の課題である。「科學と道德は、人間を總ての個人的思惟に內在する統一へ導きつゝ個體そのものの內部に於て、共同社會を、諸精神の共同社會を建設する。そしてそれによつて同時に又、內面性の原理を有力なる眞の理想として是認するのである。」

フェリクス・アルカン書店は最近「新哲學的百科全書」といふ叢書を出してゐが、既に刊行されたものには、ドゥラクロアの「心的生活の主要形態」ディジョンの教授ガストン・バシュラールの「新科學的精神」と並んで、ブランシュヴィクの「知性の諸時代」がある。

ブランシュヴィクの新著は一九三二—三三年冬期に於けるソルボヌの講義の要旨である。自然に關する合理的科學の建設以來、人間精神の進歩といふことが問題にされてゐる。パスカルはこの問題を取り上げた最初の人であらう。コントは、かの三段階の法則によつてそれを解き得たやうに主張したが、さうは簡單に行くものではない。コントの實證主義は一種のロマンティスムに墮し、その三段階説は結局眞の實證主義の否定に終らなければならない。近來の原始民族に關する研究は、人間思惟の低次の諸段階、科學的認識の諸狀態についての我々の理解を更新した。人間精神の進歩といふ問題は今一度見直されなければならない。眞の實證主義はコント的實證哲學ではなくして、合理主義的觀念論でなければならない。それは先づ實證科學の方法から解放されねばならない物が理解されるとは如何なることか。可知的とは何をいふのであるか。それは把捉したことを信じて感じる納得であるのか。若しさうであるなら、原始民族は、今日我々の世界が學者といはれる程の人にわかるよりも、ずつとよくわかる世界に住んでゐたことになる。所謂原始社會にあつては、宇宙は因果性に飽充し、そこには、わからぬものは何もない。人事にも干與する超自然的なる諸力のはたらきを以て一切を説明し去る。若し今日因果性を、何等批判なしに、適用することによつて、總てを説明し得るとするならば、それは原始的思惟への復歸以外の何物でもない。さて民俗學の領域から史學の領域に移ると共に、人間の知性はそれ自らに屬する眞理の諸規範を獲得する。しかし人間の知性は、ピュタゴラス派に到つて、所謂「通約し得ないもの」を見出して、實在論的表出の素朴なる要求との矛盾に陷る。非合理的なるものの幻影に出會つて逡巡する。かくして人間の知性に殘される自由なる領域は名辭的なる區分である。それはアリストテレース的形而上學の基礎となる。形式論理の特權は、實證科學の到來後も殘存し、今日まで續いてゐる。それは語ることと考へることとの區別を知らぬ本能的なる實在論、言語によつて豫め設けられた框の外では、何物をも理解することを拒む獨斷論である。批判的觀念論は、世

界認識を、論理的形式の普遍性にも、感覺的直觀の所與にも、犧牲に供することは出來ない。既に幼年期を脱した人間の知性はことばの萬能を信じない。「ディスクルの宇宙」に「レーゾンの宇宙」を對抗せしめ、それを乘取らうとする。前者は述語的命題の優先に基礎づけられ、後者は物理的、數學的諸關係によつて構成される。かゝる世界へは、既にデカルトによつて接近の道が開かれた。しかし彼は後へ歸る用心を忘れてゐた、明證の要請の擒となつたのである。カントは、科學的眞理の判斷の言語と、話の分節の上に立つ心理學の言語とを混同してゐる。この二つは元來人間文化の同じニヴォーにも、同じ時代にも屬するものではない。ヘーゲルはこのことばの混亂をその極限にまで推し進めた。矛盾を論理の過程に於て綜合しようとするのである。しかし、反對者の綜合といふことは、原始的諸時代のマジー的思惟の殘滓ではないか。「ディスクルの宇宙」と「レーゾンの宇宙」との爭鬪は如何にして、客觀的に融和されるか。それには、現代のロッスティク的研究が、當初依據してゐたスコラ的實在論を斷乎と棄却するに到つて道程に從はなければならない。可知的世界を假想し、それに科學が自然の眞理に到達する諸進歩を服屬せしめてはならない。我々は最近諸科學の目覺しき進歩に注目することを忘れてはならない。――非ユークリド幾何學、アインシュタインの新宇宙觀、量子論物理學に對する因果性の新しき解釋等々。かくして我々の「知性の諸時代」についての考察は、人間理性の恣意的なる不當なる解釋に繫がれる、主知主義に對する、現下の論難を一掃しなければならない。

アベル・レーの最近の著に「ギリシァ科學の少壯期」がある。彼に從へば、哲學は現代の科學的思惟の歷史以外には存しない。哲學卽實證科學である。かゝる主張はフランスの學界に於てのみ承認されるであらう。科學史は一つの完全なる分科であり、その研究は廣汎に亘り、その反省は深切である。彼の新著は例の「人類の發展」叢書に屬し、「古代に於ける科學」の第二卷であつて、同じ著者の「ギリシァ以前の東方科學」を承けるもの、フランスに於ける科學史の開拓者、ポール・タヌリに捧げられてゐる。「ギリシァ科學の少壯期」は四部に分たれる。(一)イオニアの自然哲學者とギリシァ科學の發端、(二)ピュタゴラス派を周る科學的思惟の發展、(三)前六世紀末から五世紀中葉に至る數學及び物理學の狀態、(四)五世紀中葉までの、テクニク的性格を有する科學的進歩の綜觀。レーのいふやうに、少壯の時期は成熟期よりも興味がある。近代科學となる素地が一層よくあらはれてゐる。その無制限の豐饒の中に未來の諸可能性が含蓄されてゐる。そこには四つの主要なる方向が見出される。(一)イオニア人に於ける自然觀察への傾向、アナロジーを發見して、それによつて普遍化を試みる。それは近代の實驗的方法の萠芽、物理學の神話からの解放を意味する。(二)その出生がゼウスの頭から武裝して生れ出た女神を思はせる數學的方法、純粹に合理的なる思惟を目指し、その仲介になる數特に形態をなす數は一種のマジー的なるはたらきを有すると考へ

られる。(三)さきの二つの方法の綜合なる歸納的數學的方法、即ち科學の王道である。(四)形式論理學、辯證法、ソフィスティクの方法。レーの著作は、かゝる種類の書が陷る二つの邪道、博識を示さんとして細部に立入ること、全體を見ることを急いで明瞭を缺く概括から免れてゐる。更にレーの敍述の特色をなすことは、彼自らが序言にいふやうに、純粹なる哲學的見地からではなく、あくまでシァンティスムの立場から見られてゐる。それはロバンの「ギリシァ思想」と著しい對照をなすものである。彼はテクニクの科學への解消、或は逆に科學的方法と精神との、テクニクのマジー的領域への侵入を力説する。この時代の史料は不足で研究は困難であるが、我々近代人から見ても、科學的精神といはれるものがこの時代に於てはじめて生れ出たことには異論はなからう。ホモ・ファベルからホモ・サピエンスへの移り行き、それは他の文明にも他の時代にでもなくして、ギリシァの、しかもこの少壯の時期にのみ見られるのである。

今年フランス哲學界に於て最もセンセイショナルなりし著作はモリス・ブロンデルの「バンセ」第一卷であらう。彼の「アクション」(學位論文)がはじめて公にされたのは一八九三年の秋であつた。ついで「護教論に關する現代思想の諸要求と宗教問題の研究に於ける哲學の方法とについての書簡」(九六年)、「近代の聖書解釋の哲學的缺陷」「教義の歴史的價値」等々を公にして、次第にルロア等と接近するに至つた。彼等は徹底したモダニストではないがカトリクの護教論も現代の進歩に順應しなければならないと主張して教會から睨まれた。一九二〇年には「知性の訴訟」を公にしてベルグソンに所由する、誤れる主知主義に對する反抗の運動に與した。(しかし、ブロンデルの立場はベルグソンやルロアとは異るところがある。)それは、新トーマス派から烈しい攻撃を受けた。爾來彼は、教職の傍、著作に專念してゐたが、一九二八年に至つて彼のオルトドクスへの歸向が傳へられた。同じ年に彼の門下ポール・アルシァンボルといふ人が「完全なる實在論に向つて」といふ小書に於て、ブロンデルが一切を包含せる哲學的體系を、總ての相反的立場を融合する體系の建設を企圖しつゝあることを語つたそれと前後して、例の會見記者フレデリク・ルフェーヴルが「ブロンデルの哲學的道程」といふ小書を出して、彼が「思惟」、「存在」「行動」、「基督教的精神」の四部からなる體系的述作に着手してゐることを傳へた。(彼の「アクション」が稀覯書であるのは、この四部作への編入を計畫してゐるからであるといはれる)今年になつてやつと待望の書「バンセ」の中、「思惟の生成とその自發的上昇の諸階層」といふ副題を有する第一卷が現れた。

彼のいふバンセとは思想とか思惟とかよりは廣義のものであつて、心的なるもの一切を含むものである。彼の主張には二つの基礎的なるものがある。心的なるものには種々の階層がある。他方かゝる階層の存在することは心的なるものの上昇を含蓄してゐる。心的なるものは人間の精神以外にも、又それを考へる人間精神を要しないやうな諸形態に於ても存在する。宇宙は、ブロンデルに

從へば、完全なる又同時に單一なる相互依存である。このことは宇宙が心的なる秩序に屬する實在であることを意味する。それは完全に質料化された存在に潜んでゐる非質料的なる樣相を示すものである。世界は、普遍的なるものへの動向を、諸範疇に歸屬せんとする傾向を示してゐる。それは我々自らの普遍化の要求と同一化の傾向に對應するものである。かゝる樣相は心的なるものに、その總ての階層を通じて、見られる。それはブロンデルによつて「ノエーシス的樣相」と呼ばれる。しかし世界は同時に又、絶え間なき生成と無限量の特殊なるものである。回想や期待を喚起し、個體、唯一者を覺知せしめる。この第二の樣相も世界全體に行き亘つてゐるが、それはブロンデルによつて「プネウマ的樣相」と呼ばれるものである。次に生物の世界を考察して、彼等の生活が本能と直觀に依存するのを見出す。かくして、意識、人間の心的活動全體を意味するものとしての意識以前に、心的なるものの三つの低次の階層がある。(一)宇宙的思惟(宇宙の心的側面)、(二)有機的思惟(諸物の有機的及び有機化的流動)、(三)心的思惟(動物の知性)これら三種のパンセは、心的なるものが我々の外に、又我々に依存することなく存在することを示す。最後に、「思惟する思惟」(人間の意識)。そしてパンセがかくの如き四つの階層をなすことはとりもなほさず心的なるものの上昇する證據である。人間精神は動物的知性から根本的に異つてゐる。だからといつて、動物的なる經驗が全然失はれてゐるのではない。人間精神の活動も亦常にノエーシス的であると共にプネウマ的である。總ての知覺、總ての意識的意欲は眞理を豫め知覺し、豫見する。常に新奇なるものを求め、前方に押し進められる。しかし、知覺の諸對象は、思惟の基礎であることも目的であることも出來ない。總てが過程であるのは、たゞ外界に於てのみではない。精神は決して受動的ではなく、それに與へられたものを、受容するや否や變樣する。それ故、諸對象は決して終極的であることはない。精神は自己に連れ戻される。主觀的なる生はその極限にまで押しやられて、自らの生に屬するものを調べ上げる。そしてかゝる生も、たゞ内なるものから上なるものへの過渡に過ぎないことを、從つて我々には常に他者であり、我々を超越する高次の秩序の存在することを知る。もしこの超越者が神でないなら、論理的、形而上學的、道德的、社會的、宗教的建築は、觀念的なるものの範疇に支へられることとなるだらう。かゝる恣意的なる空想は許されない。思惟は自己矛盾に陷ることを免れようとする限り、超越者がたゞ觀念的に對象として存するのではなく、實在的に實體として存在することを認めなければならない。心的なるものは、宇宙に潜在し、諸物の流轉に於て顯現し、動物知性に於て活動するが、心の活動は基本的には、絶對者の探究であり、神的なるものとの合一への希求である。思惟の法則は、豫め秘かに神の存在を構想することによつてのみ存立し得る。最後に、ブロンデルは神の存在の證明の九つの段階を精査してゐる。第二卷に於ては、思惟の諸責任とその履行の諸可能性を考察せんとする。(E・H)

バーゼル大學教授カール・ヨエルは本年三月二十七日生誕七十年を祝され、記念論文集の發刊を見たが、その後間もなく訃報が傳へられた。彼は新しき形而上學の建設に努力する理想主義者として、又特色ある古代哲學史家として知られてゐた。その著「古代哲學史」(第一卷は一九二一年刊行)は終に未刊に終つたものと思はれるが、晩年企圖した大著「世界觀の變遷」は、一九二八年第一卷を終り、第二卷の刊行は生前その最終分册を殘すのみにまで進捗、最後の一册も既に脫稿され、フランツ・ボエームによつて本年中には刊行されるとのことである。

二人の有力なるスピノーザ學者カール・ゲープハルトとスタニスラウス・フォン・ドゥニン・ボルコヴスキーとが相次いで世を去つた。ゲープハルト(フランクフルト・アム・マイン)は、最初の完全なるスピノーザ全集の校訂者、「哲學文庫」版スピノーザ著作集の大部分の飜譯者、かのフロイデンタールの「スピノーザの生涯と學說」の完成者、ハーグの「スピノーザ協會」主事としてその生涯を我が哲學者に捧げた人。「スピノーザ全集」第五卷としてコンメンタールを計畫し本年中に刊行を豫告してゐたが、果して完成されたであらうか。獨譯スピノーザ著作集の改修も期待されたが、今は空しといはなければならない。彼の死はたゞに「スピノーザ協會」にとつてのみならず、全哲學界にとつて代へ難き損失である。

イエスス會員ドゥニン・ボロコヴスキーは、一九一〇年「若きスピノーザ」を刊行し、その特色ある解釋によつて知られてゐたが、最近前著を第一卷とする全四册より成る「スピノーザ」と題する大部の書を企圖し、昨年第一、二卷を出した。

新刊紹介

本田義英著　佛典の內相と外相

本書は印度學專攻の本田博士が過去數年來諸種の雜誌或は學會講演に發表せられしものと未發表の論文とを集錄せる二十五篇より成る論文集であり、先づ其內容を示せば次の如きものである。(一)密友書の研究、(二)龍樹對引正王の問題とその資料に於ける用語に就て、(三)古代印度に於ける普賢信仰の研究、(四)上世大乘經典に於ける陀羅尼、(五)觀音譯語考、(六)觀音古名論、(七)觀音信仰と呪咀還著、(八)Gadgadasvara と妙音、(九)擬聲語Gungunの轉訛と妙音の問題、(十)妙音語義論後記、(十一)經典より觀たる造像の信仰管見、(十二)十如本文に對する疑義、(十三)十如本文論批評に答ふるの資料、(十四)十如本文否定の積極的論料、(十五)法華經史上に於ける龍樹、(十六)後分法華經に於ける二三の問題、(十七)法華經研究の資料、(十八)スタイン氏蒐集西域出土梵本法華經、(十九)カダリック出土法華經梵本三種五品の斷簡に就て、(二十)ファルハード・ベーグ出土梵本法華寶塔品の研究、(二十一)燉煌及高昌本法華度量天地品の解說及其本文比較、(二十二)盂蘭盆經と淨土盂蘭盆經、(二十三)燉煌出土智度論に就て、(二十四)再び燉煌出土智度論に就て、(二十五)燉煌本智度論と現行藏經本との本文異同對校。

以上集錄する所の論題に由りて明かなるが如く法華研究に關す